

9月10日(火)

我 ら 神 を 信 ず

聖書朗読 士師 7:8~21

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。
ピリピ 2:13

アメリカの硬貨と紙幣には、「我ら神を信ず」という文言が書かれています。ギデオンには、まさにこのような神様への信頼が必要でした。

イスラエルの民がミデヤン人に打ち負かされ続けていたとき、神様はギデオンに、ご自身のみことばに逆らうイスラエルの民を導くようにと仰せられました(士師 6:14~15)。その時ギデオンは、他よりも勝る偉大な力と軍事に長けた能力がなければ戦の勝利を導くことはできないと考えており、その点で自分はその立場には相応しくないといい、その使命を辞退します。けれども、その時の彼には重要な視点が欠けていました。

後にギデオンは兵を集めますが、神様は、戦う民の数を 32000 人から 300 人に減らされ、ギデオンに、民を率いるには相応しくないといい、その思いを持たせ続けられます。その目的は、戦での働きを挫くものではなく、戦の勝敗の原因を、ギデオンとその民自身に帰することのないためでした。

結局のところ、勝ち負けは問題ではなく、ギデオンの働きが試されるものであったのです。ギデオンは、敵を打ち負かすことを求められていたのではなく、神様に信頼し、ミデヤン人のことは神様に委ねることが求められていたのです。この神様の呼びかけに応答するために、我ら神を信ずという信仰がギデオンには必要であり、また、勝利も、同じ神様への信頼が必要だったのです。

讃美歌 284

祈り 父よ。成功であれ失敗であれ、思い煩うことなく、あなた様の導きに忠実に従うことにもっと心を向けることが出来るようお助けください。落ち込んだり、あるいは、傲慢になったりしてしまう私たちをお赦しください。あなた様のみそばにもっと近づけてください。

イエス様の御子のお名前によって祈ります。アーメン。

リチャード・ウォルフ
カンザス州 オラス

9月11日(水)

自 己 犠 牲

聖書朗読 ルツ 1:10~22

あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られた いのです。
ルツ 1:16~17

ナオミに立てたルツの誓いは、驚くべき決意ではないでしょうか。その時のルツ自身とその将来にとって、その誓約がどのような意味を持つものであったか考えてみてください。ナオミと共に行くということは、ルツにとっては異国の地に異邦人として住まなければならないということの意味していました。イスラエルの国では、異邦人は軽視される存在であった上に、ルツは未亡人で、イスラエルの社会では未亡人というのは、たとえ地位があったとしても、それは殆ど意味のないものでした。そのためルツには殆ど再婚の可能性はありません。さらにルツは女性です。当時、女性は所有物、あるいは使うものとして見なされ、虐げられる存在でさえありました。ルツは、義母のために自らの将来を諦めたのです。

私にはとても魅力的な独身の大叔母がいました。彼女はちょうど大恐慌が始まった頃、姉と義兄を亡くしました。姉夫婦には13歳、5歳、3歳になる子どもたちがおりましたが、彼らは孤児となってしまったのです。親族は誰も彼らを引き取ろうとはしませんでした。大恐慌の時代に、独身で3人も子供のいる女性に求婚してくれる男性など殆どいません。けれども彼女は、子供たちを引き取る決意をし、彼らのために自らの将来を諦めたのです。実は、その子供たちの末っ子が、私の父親なのです。

讃美歌 393

祈り 天のお父様。私たちのために、自らを犠牲にし、明るい未来に対する希望を持たせてくれる人々を与えてくださり感謝します。私たちも、他の人のために喜んで犠牲を捧げる者とならせてください。

イエス様のお名前によって。アーメン。

デイブ・ブランド
テネシー州 メンフィス

9月12日(木)

落 穂 拾 い

聖書朗読 ルツ 2:1~12

主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。
主の真実、大盾であり、とりでである。 詩篇 91:4

落穂拾いは、神様がモーセの律法に定められた恵みです。畑で刈り入れた物のうちいくらかを、在留外国人やみなしご、やもめのために残しておきなさいというものです(申命 24:19~21)。ルツはこの要件を満たし、ボアズの畑へ行きます。彼女は在留外国人であるモアブ人でした。

驚くことに、この律法の下では、モアブ人はその子孫まで、主の集会に入ることは出来ませんでした(申命 23:3)。けれどもここで、ボアズを通してルツへの神様の恵みが示されました。人が神様のみ翼の陰に身を避けるとき、恵みを見出すのです。

ナオミもこのお話の中で大きな部分を占めています。神様は、彼女の人生を喜びから苦しみへと変えられました。彼女は異邦人の地で夫と息子を亡くし、残されたのはルツだけとなりました。そしてそのルツは、取りこぼした落穂を拾いにいく事だけを求めました。ルツは気に入ってもらえるだろうという希望を持ち、ナオミもそう思っていました、実際そうでした。私たちがそのような希望を持っているでしょうか。

辛く当たられる日々を過ごしていると、また受け入れてもらえるのだろうかと不安になるでしょう。ルツは気に入ってもらえるだろうという希望を持って落穂拾いに出かけました。そして、彼女は落穂拾いで恵みを見出すことが出来たのです。これこそ、神様に避け所を求める人々にもたらされる恵みです。

讃美歌 242

祈り 全能のお父様。私たちのこの世の歩みには、喜びもあれば苦しみもあることを知っています。私たちが苦しみに遭うとき、どうかあなた様を避け所とし、あなた様の良きみわざを見出すことができるよう助けてください。
イエス様のお名前によって。アーメン。

ロン・グズマン
テキサス州 サンアンジェロ

9月13日(金)

し っ か り し た 妻

聖書朗読 ルツ 3:1~13

さあ、娘さん。恐れてはいけません。あなたの望むことはみな、してあげましょう。この町の人々はみな、あなたがしっかりした女であることを知っているからです。
ルツ 3:11

ルツ記は短いお話ですが、注目すべき内容のもので、忠誠と服従と献身の姿勢が描かれた大変興味深いお話です。ルツの義母であり、不幸にも夫と二人の息子に先立たれたナオミは、「あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」(ルツ 1:16~17) というルツのことばに心癒されます。

ルツの決意は、たとえ死ぬことがあっても、ナオミとともに行こうというほど真剣なものでした。近い親類のボアズの畑で彼女が落穂拾いをしているのを人々が見ていたところ、彼女の行いや振舞いが素晴らしいので、その彼女の姿勢はボアズの耳に届きました。そして彼女はボアズに気に入られ、彼女の行いに対する正当な報酬を得て、刈る者たちの傍で食事をするよう招かれます。ソロモン王は箴言でこう言っています。「しっかりした妻をだれが見つめることができよう。彼女の値打ちは真珠よりもはるかに尊い。」(箴言 31:10)

ルツの美しく真つすぐな性格を見て、ボアズはルツを妻として買い戻します。そして彼らが結ばれることによって、神様は彼らに息子を授けて下さいます。そして、彼らの血族から、ダビデ王、さらには、私たちの救い主であるイエス様がお生まれになることとなるのです。ルツのお話はなんと素晴らしいものなのでしょう。

讃美歌 390

祈り 親愛なる主よ。慰めを求める人を慰め、仕えてもらうことを必要としている人に仕えることによって、私たちがみ心を行なうことができますように。また、私たちの行ないが周りの方々にも良き影響を与えることができますように。

イエス様のお名前によって。アーメン。

コニー・シンプキンズ・トーマス
ケンタッキー州 マウントワシントン

9月14日(土)

愛を受け入れる

聖書朗読 Iサムエル 1:1~8

いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

Iヨハネ 4:12

今日の聖書箇所には、ハンナの信仰と、彼女の夫エルカナへの愛情が素晴らしい証として描かれています。ペニンナについて、エルカナが、そのすべての息子、娘たちにいけにえのそれぞれ受ける分を与えたとありますが、ハンナについてはそう書かれていないことから、彼女は長いこと不妊であったことが分かります。

ハンナは、子供が生まれなことを苦しめ、エルカナに対して心から喜んで応答することが出来ずにいましたが、エルカナはハンナに「あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。」と優しいことばをかけます。

エルカナはハンナを愛していましたが、彼女が自分の不妊であることを苦しめて、彼を拒んでいると感じ取っていました。私たちも、自分の愛する人に不愛想な態度を取ることで、彼らが自分に愛されていないと感じさせてしまう事はありませんか。

私たちも、後悔の念や難題を抱えていたりすると、そのことで愛する人に沈んだ様子を見せてしまうことがあるでしょう。愛するその人とは全く関係のないことであったとしても、そうした態度によって、何かしてしまったのか、あるいは、しないのがいけなかったのかと相手に思わせてしまうでしょう。

私たちは自分の個人的な問題で頭がいっぱいであっても、それによって愛する人との関係に傷をつけてはいけません。家族の中でどのような立場にあろうとも、愛を与えるだけでなく、相手の愛を受け入れることにも努めていきましょう。

讃美歌 401

祈り 天のお父様。他者の示してくれる愛を、おろそかにしたり拒んだりすることなく、受け入れられる者としてください。私たちに愛を示してくれる者とあなた様を愛する者としてください。

イエス様のお名前によって。アーメン。

ラニタ・ブラッドリー・ボイド
ケンタッキー州 フォート・トーマス

9月15日(日)

物事の核心

聖書朗読 Iサムエル 17:16~28

あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。

Iヨハネ 4:4

重要だと思っている事が実はそうではないことが、時にあるのではないのでしょうか。Iサムエル17章のダビデとゴリヤテのお話は、ダビデが石投げでゴリヤテを破ったという点に注目してしまいがちです。エッサイの年若い息子が石投げで石を放ち、その石がゴリヤテに当たり、額に食い込み、大口をたたいていた巨人は黙り、地面に倒れました。ここで拍手喝采となりますが、実は、この石投げの勝利を導く出来事は、その前に起きているのです。

背丈は6キュピト半もあり、傲慢極まりないゴリヤテという巨人は、イスラエルの民をなぶるため、ペリシテ人の陣営から大股でやってきて、40日間朝早くと夕暮れに姿を現しました。そこへ、若く戦にも慣れていないダビデがやって来ると、彼は即座に問題の核心を捉えます。それは、ゴリヤテでも木の高さほどもある槍でもなく、ここで着目すべき点は、イスラエルの民を嘲るこの巨人が神を否定しているという事だったのです。

ここで、ゴリヤテを倒す前に起きた重要な出来事とは何でしょうか。それは信仰の篤い羊飼いが巨人の殺し屋を倒そうとしたとき、生ける神の陣をなぶるこの巨人が自分を誰だと思おうかと尋ねたときの事です。ダビデはなんと答えたでしょう。彼の答えは、生ける神と比べたら、誰であつてもたいしたことはないというものでした。

大きな問題に取り組みなければならない時、それを物事を中心だと見誤ることのないようにしましょう。生ける神への信仰に目を向けてください。そして神に信頼し、目指すところに導かれるよう助けていただきましょう。

讃美歌 270

祈り 親愛なる主よ。人生の大きな問題が立ちほだかり、先が見えないほど脅かされる時、あなた様の力を認め、私たちの弱さのうちにあなた様の栄光が現れると信ずる信仰の目をお与えください。

イエス様のお名前によって。アーメン。

ラニタ・ブラッドリー・ボイド
ケンタッキー州 フォート・トーマス